

---

# 人の背中で龍は眠る

Ponkichi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人の背中で龍は眠る

### 【Nコード】

N5110Z

### 【作者名】

Ponkichi

### 【あらすじ】

その刀は一太刀で何千もの妖を斬ることができるという。  
その刀は一太刀で何万もの人間を斬ることができるという。  
その刀は使い手により名を変える。  
あるときは、聖剣。また、あるときは魔剣とよばれた。  
その刀は使い手により形を変える。  
あるときは、巨大な大剣や太刀となり、また、あるときは、小太刀や双剣となった。

妖対 人間対 人間の闘いが今、始まる。

## 序章（前書き）

稚拙な作品ですが、楽しんで読んで頂けたら幸いです！  
よろしくお願ひします！

## 序章

その刀は一太刀で何千もの妖を斬ることができるという。

その刀は一太刀で何万もの人間を斬ることができるという。

その刀は使い手により名を変える。

あるときは、人間の手に渡り妖を倒す聖剣になり、また、あるときは、妖の手に渡り人間を滅ぼす魔剣となった。

その刀は使い手により形を変える。

あるときは、巨大な大剣や太刀となり、また、あるときは、小太刀や双剣となった。

だが、一つだけ変わらないことがある。

それは、この刀が破壊の刀だということだ。

-----

「おじいちゃん！おはようございます！ほぐら、隼人も挨拶しなさい！」

この口うるさいだけ女は、俺と同じ家に住んでいる上原愛梨だ。別に兄妹という訳じゃ無い。ただの幼馴染だ。

「おはよう、和尚さん」

俺の名前は黒崎隼人。

ここ柳楽寺しゅうらくじの前に母子手帳と一緒に当時5才の俺は捨てられていた。

愛梨も俺も今は14歳、中3だ。

「隼人、おはよう。愛梨はもう少し女の子らしくなさい」

この人は、柳楽寺の住職で愛梨の祖父、上原楽尚。

俺を拾ってくれた張本人だ。

昔は俺を捨てた親を恨んでいたが、今は和尚さんに感謝する気持ちの方が大きい。

そんなこんなで平和に暮らしている。

あることを除いては…

## 序章（後書き）

僕自身、受験生なのであまり更新出来ませんが、更新しない訳では無いので気長に見守って下さい。  
感想お待ちしております！

謎の美少女は波乱を呼ぶ？（前書き）

週1くらいのペースで更新出来たらっと思っ  
ています！  
小説と受験勉強の両立頑張ります！



## 謎の美少女は波乱を呼ぶ？

俺の通っている徳山第一中学校には普通では考えられない組織が当然の如く成立している…

それは、

裏風紀委員会。

一般的に風紀委員会といえば髪を染めているかとか、正しい服装をしているかとかを取り締まるだけでマンガの様に不良どもを倒したりはしない。

だが、この中学校はそういった荒事専門の裏風紀委員会がある。メンバーは校長しか知ら無い。

そして、俺 黒崎隼人も裏風紀委員会のメンバーの1人だ…。

事の始まりは…

-----

中学校に入学してから一ヶ月、裏風紀委員会なんて知らなかったとき…

「隼人！早く起きなさい！」

「うるさいなあ〜愛梨、あと5分〜」

朝早くからご苦労なことだ。今何時だと思っている…

「って、うわぁ！もう7時半じゃないか！」

やっべー、遅刻する。

「隼人、私、先に学校行ってるから！」

俺は朝食を食わずに歯を磨いて、制服を着て家を出た。俺は登下校は歩き派だから時間がかかる。でも、まあ普通に歩いててもギリギリ間に合うだろう。

そんな折に…

「君かわいいねえ、俺たちと良い事しない？げへへ」

「あの…、やっ、止めて下さい！私、急いでるんです！」

見るからに不良です！って感じの奴らが3人。絡まれる美少女。しかも女の子の制服は同じ中学校…。

ハァー、どうしたものか…。

そうこう考えながら不良たちをみていると…

「オイッ！その中坊、何さつきから見てんだよ！何、喧嘩売ってるの？」

あー、最悪。俺まで絡まれたよー。仕方ない…

「放してやれよ、その子嫌がってんだろっが！」

そう言いつつ俺は女の子の手を掴んでいるリーダーっぽい金髪の奴

の手首を握った。

「あ？やんのか、コラ？…ぎいやあー！骨が、骨がー！」

けつ、造作も無えなあ。そんな痛くしてねえだろ？ちよつと手首の関節の骨と骨の間に親指をねじ込むくらいの勢いで握っただけじゃねえか。

「まだ、やんのか？俺は別にいいけど、どうする？」

お願い！もう、時間がない！ここで諦めてくれ！

「クツソー、舐めやがってー！ぶっ殺す！いいかお前ら、手え出すんじゃねえぞ！」

あーもー、これだから身の程をわきまえねえ奴は面倒臭いんだよ。

「死ぬえー！」

お前の台詞いちいちザコキャラの台詞なんだよ！最初から終了フラグたってんだよ。

相手の右ストレートを左手で流し、顎の辺りに掌底を打ち込む。

相手は白眼をむいて倒れた。

「軽い脳震盪だ。暫くは気が付いても立てねえぜ。どうする？まだやるか？」

あー、完っ全に歩いてたらに遅刻だ！走りたくねえけど、クソー、

皆勤賞のためだあゝ…。

「あいつはヤベえよ、勝てねえ」

倒れた金髪を担いでスゴイ勢いで逃げて行った…。最初からそうしろよ！

「大丈夫？何もされなかった？」

喧嘩用の敵つい顔から普段よりも優しい顔で言った。

「はい、大丈夫です…。あの…ありがとうございました…」

おっとりした感じが清楚で可愛い〜！この上目遣いがなんとも言えない。

「良かった、君も徳山第一中学校だよな？俺の名前は、黒崎隼人。1年2組だよ。君の名前は？」

とりあえず、これが礼儀だよな？

「わ、私は神谷みゆきです。あの…隼人さんも徳山第一中学ですか…？」

可愛い〜！っじゃなくて！

「うん、そうだよ。あと、隼人でいいよ。ヤバいもうこんな時間だ！走るよ〜！」

俺は返事も聞かずに彼女の手を取り走り出した！

「う、うわあ〜！隼人さん、早過ぎますよ〜！」

「隼人でいいよ！ほら、急がないと遅刻しちゃうよ！」

-----

みゆきは1年1組らしく途中で別れた。そして、なんとか滑り込み  
セーフ！

謎の美少女は波乱を呼ぶ？（後書き）

このような作品を読んで下さりありがとうございました！

暑苦しい奴はクラスに1人はいる…

昼休みになり、教室の中で友達とたわいもない事を話していると、クラスの女子が

「黒崎君、入り口で神谷さんが黒崎君のこと呼んでるよ」

と教えてくれた。

何だろ？何か用かな？

「おい！隼人、いつからお前は徳山中のアイドル、神谷みゆきさんと仲良くなつたんだ？お前、彼女がいない同盟の誓いを忘れたのか？彼女が出来たら必ず言う！鉄則だろ！」

こいつは、同じクラスの後藤良樹。とにかく、暑苦しいのが取り柄のバカだ。

「バーカ、そんなんじゃねえよ。それに、そんな同盟結んだ覚えはない！」

「は、隼人さん。あ、あの…今朝は、本当にありがとうございまして！」

みゆきは、勢いのあまり叫ぶ様にいった。

やはり、他の奴等から注目をあつめた。

「別にいいよ、男として当然のことだよ。それに、俺もあいつ等に喧嘩売られたからかったただけだ。みゆきは気にしなくていいんだよ」

いきなり、下の名前ってのはダメだったかな？でも、自分は下の名前前で呼んでって言うてあるし、これで対等だろ。

「え、なにに隼人がどうかしたの神谷さん？」

後藤く！今出て来たら話しが広まっちまうだろく。

「あの…今朝、私が高校生に絡まれてたところを助けて頂いたんです！」

あー、言っちゃったよ…。1番言っちゃいけない奴に…。

「えー！隼人、マシで？隼人が不良から神谷さんを助けた？」

案の定、大声で言いやがった。さらに、視線が集まってきやがった。

そんなこんなで、放課後には学校のほとんどの奴はこの話を知っていた。

俺も、あまりにも後藤がしつこく聞いてくるので詳細を話してしまっただ…。

これが、全ての引き金だった…



暑苦しい奴はクラスに1人はいる…（後書き）

面白くないと思った方は、はっきり言って下さい！  
具体的に言って頂けると助かります！

なかなか危険なあること…(前書き)

更新遅くなってすみませんでした！

なかなか危険なあること…

放課後みゆきと帰ろうとしていると…

「おーい！」

突然、後ろから澄んだ少女の声で呼び止められた。

誰だ？入学して間もないし、女子は苦手だからそんなに女友達なんていないはずだが…

「君、黒崎君だよな？黒崎…隼人君？」

は、はい？僕はこんなに美少女に知り会いはいませんが…  
まあ、美少女と言っても年上だが…

「はあ…そうですけど…？」

「私は生徒会長の如月有香！有香姉って呼んで！」

？？？生徒会長様が僕のような一般の生徒に何に何か用でも？

「彼方と少し話したいの今良いわよね？場所を変えましょ」

もはや、命令に近いんですけど？

選択の余地無しですか！

-----

と言う事で、誰もいない階段の踊り場に来ている訳だが…

「彼方に恨みは無いけど、彼方には死んでもらうわ！」

…？何をいきなり？

「は、冗談ですよね？」

「彼方には冗談じゃない事は通じてると思ってるんだけど？」

ああ、踊り場に来た時から感じている殺気は素人じゃない！

俺も和尚さんに色々、修行をつけてもらってるから分かる。こいつは本気で俺を殺る気だ！俺も僕はでやらなきゃただじゃすまないな…。

逃げようにもみゆきのスピードじゃ多分追い付かれる。

「みゆき、先に帰ってろ…！」

みゆきをかばいながら戦える程こいつは雑魚じゃない！

「嫌です！私、もう逃げません！邪魔はしませんから！」

ちっ、しゃーねえ…やるか！

「分かりました！みゆき、少し離れてろ。手加減は…しませんよ…。」

怪我しない程度に…

俺も殺気を全開にして生徒会長こと如月有香にぶつける…。

「へえ、いい気してんじゃん

こりゃあ楽しみだ。行くよ！…！」

そう言うか否か、ナイフを何処からともなく出して突っ込んで来る！  
ナイフと戦うなんて修行じゃやった事も無いけど、様は普通に殴つて来る奴と根本的には同じ…。後は、応用だ。

「女子に手を上げるのは性に合いませんが…ね！」

俺はなるべくかわして流してを繰り返して相手のスタミナ切れを待つ。

「かわすだけじゃなく、後ろの…彼女を守る為に…後ろにも逃げないとは、やるじゃない…か！」

やはりな、いくら強いと言っても、女子のスタミナの消耗は速い。

「これで決めます！」

俺は右手から振り下ろされるナイフを左手で手首を掴み、右手でナイフを奪い、そのまま左手で相手の首を締め上げナイフを首元に突き付けた。

「はう？な、完敗よ！そんな技、チートよ！」

人前でナイフを振り回して拳げ句の果てに殺そうとする方がどうかと…

「いやいや、いきなりナイフを振り回す方がチートの技かと…」

「フッフツ、ゴメンなさい。彼方を試したかったの！でも、本気で殺す気だったのは本当よ。」

「いやいや、試すにしても他に方法が…ってか何を試すんだ！  
ってか、目が笑ってない！」

「何を試したんですか？こんなただの一般生徒に？」

「フツ、面白い冗談ね？ナイフで隙をついても避けられ、連続攻撃も避けられ、ナイフを奪われ、首元に突き付けられ…。普通の人、いや？警察にも出来ないわ！彼方、一体何者？」

まあ、確かに…。俺自身、そんな事したの初めてだし…。

「そんな事より、用はなんだ？」

「それは…彼方に、裏風紀委員会に入っしてほしいの！」

—————

って事で、あんな性格だから有無を言わさず強制所属…。

で、俺が2年になり当時、委員長だった奴が、戦闘狂で何もしてない奴も適当に因縁付けてボコったりしてたから、委員長とその仲間を仕方なくボコったら、何時の間にか2年にして委員長になる事に…。

そんなこんなでまあ、色々あったが平和に暮らして居る。

色々は、また別の機会に…。

とりあえず、あることの半分は終わり。  
もう、半分は和尚さんと俺だけしか知らない秘密だ。

それは…

和尚さんから唐突に言われた

「君は人間じゃないんだ。妖と人間のハーフ、なんだよ。でも、それ自体は珍しく無い。むしろ、次が重要なんだ。…」

とかなんとか。その後も色々言われた事を纏めると…

- 1、俺は、妖と人間のハーフ
- 2、故に身体能力が高い（人外並）
- 3、妖力と霊力がある？
- 4、謎の刀をハーフだけが出せる…らしい

今は妖力と霊力の使い方修行している…。  
ぶつちやけ、霊力より妖力の使い方の方が難しい…

因みに、俺が使える武術と格闘技は

- 1 空手
- 2 ボクシング
- 3 柔道
- 4 中国拳法
- 5 剣道

などなど…段位はとってないが、和尚さん直伝で、強さなら有段者

でもかなりの段位クラスらしい…。

刀は1度も出た事が無い…和尚さん曰く本当に大事な時にしか出て来ないとか…まあ、1回出せば自由に出来るらしいが。

今まで、かなりの修羅場に会ったんだがな…

街の武器を持った不良20人对俺とか…そこは靈力を使ってちよちよっとしたのがいけなかったのか…？

あ、もちろん殺してないぞ！

これが、あることのもう、半分だ。

それを含めて

何・と・か！

平和に暮らせて居る…。



なかなか危険なあること…（後書き）

更新は絶対にします！

ですが、更新は2週間〜1ヶ月くらいに1話くらいになると思いますが…

なので、たまに更新をチェックする程度で良いと思います…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5110z/>

---

人の背中で龍は眠る

2012年1月3日04時50分発行